# 主婦会 班会議の集約

主婦会では毎月一回、各班毎に討議テーマにもとずいて討論をし、その結果を集約している。その中から二～三の班を紹介します。

## 一人でも多く革新議員を

▼四山支部
A分会A班
班人員＝七名、出席＝五名
会議＝九月九日

**討議テーマ**

【不起訴になったのを知っていますか】出席者全員知っている。

【どう思いますか】腹がたって残念でたまりません。

【なぜ不起訴になったのでしょうか】資本家と国家権力がグルだからと思う。

【どう考えたらよいのでしょうか】不起訴になったからには、国会で斗わなくてはどうにもならないので、そのためにはまず革新の議員をできるだけ多く出すように一人一人が努力しなければいけないと思う。

【分会や班でどうしたらよいでしょうか。できる運動に○印を記入して下さい】

イ、CO患者見舞
ロ、CO家族・遺家族との座談会
○ハ、全国に訴えたい
○ニ、関係各庁に抗議したい

**要望事項**

いままでのように天下り式の活動ではいけなくて、一人一人がすべての問題をよく理解し、納得のいくまで知る必要がある。

## 情宣が少ない

▼宮浦支部
B分会B班
班人員＝七名、出席＝七名
会議＝九月四日

**討議テーマ**

【不起訴になったのを知っていますか】三名知らない。

【どう思いますか】不服です。

【なぜ不起訴になったのでしょうか】独占資本と国家権力がグルだから。

【どう考えたらよいのでしょうか】いまの社会のしくみを変える斗いをする。

【分会や班でどうしたらよいでしょうか。できる運動に○印を記入して下さい】

○イ、CO患者見舞
○ロ、CO家族・遺家族との座談会
○ハ、全国に訴えたい
○ニ、関係各庁に抗議したい

**要望事項**

(イ)私の班ではステッカーはお金がかかる割に役にたたないので、他に考えてほしい。

(ロ)いまごろ情宣がありませんのでしてほしい。不起訴の問題や石炭答申などについてくわしく話してほしい。

(ハ)情宣は一分会を分けてしてほしい。

## 労働者の生命を無視

▼三川支部
C分会C班
班人員＝四名、出席＝三名
会議＝九月九日

**討議テーマ**

【不起訴になったのを知っていますか】知っています。

【どう思いますか】不起訴をこのままにしていれば、ますます保安は無視され、坑内事故は多くなると思います。そのためにも、今度の不起訴は許せません。最後まで斗わなければいけないと思います。

【なぜ不起訴になったのでしょうか】政府と資本家が共謀して、証拠のもみ消しをはかったからだと思う。

【どう考えたらよいのでしょうか】あくまでも会社に責任を取らせるように、最後まで斗っていくべきです。

【分会や班でどうしたらよいでしょうか。できる運動に○印を記入して下さい】

○イ、CO患者見舞
○ロ、CO家族・遺家族との座談会
○ハ、全国に訴えたい
○ニ、関係各庁に抗議したい

**要望事項**

CO問題は三川支部の斗いという感じしかもっていないのではないか。他支部も自分の問題として把握しているか？指導部はこのことについて一考する必要があるのではないか？CO問題は合理化と別のものではない。

# 腹がたつ不起訴

## 私たちの生命の問題

# 随想

## パパとママ

港務　柿坂　敏

私達の日常使う言葉で、日本的に風土化された英語はずいぶん多い。日本語ほど豊で、感覚的にすぐれた深みと、味わいと、そして表現力にとんだ、民族の言葉はないのではないかと、日ごろ自負心をもっている私でも、英語でなくてはニュアンスがでない言葉だってあることを認めることにやぶさかではない。

しかし、これだけはぜひとも英語で表現してもらいたくない言葉がある。それは近ごろ、都会と田舎とを問わず、風土病のように流行している、父と母との代用語であるパパとママという言葉であるいったい、なにがこの言葉の流行の原因であろうか。

なるほど、パパ、ママという発音は舌足らずの幼児にとっては、たしかに、おぼえやすい、言いやすいという利点はいちおうみとめるとしても、この言葉の原因は、単純なるゴロというような問題ではなさそうだ。

お父さん、お母さんとはそれほど言い難い言葉であろうか。長い長い歴史のなかで、日本民族が育ててきた愛情と尊厳をくつがえすほど、言い難い言葉ではないはずだ。人間が生命を得て、一番最初に表現するこの言葉を、外国の言葉を借りねばならぬほど、日本人は喪失症におちているのだろうか

そして大事なことは、この言葉は日本人のたえず魂の故郷となり、厳粛と仁愛の日本的、道義心の出発点の母体ともなる言葉ではないだろうか。

お父さん、お母さんという表現は、煙草をパッパと吸うからパパおまんまを作ってくれるからママというような、そんなゴロ合わせのような言葉とは出来が違っているのだ。

この言葉の原因は、一番大切な子供が不在になり、パパ、ママを使う生活が、文化的にも高くなったような親達のはかない虚栄に因するのではないだろうか？。素足で唐芋をカジリながら鼻をたらした子供が、焼酒をのんでいる父親に、パパーなんていっている光景を想像しただけでも、ゾットするではないか。

そして、もう一つ奇怪なる事はあれほど、道徳教育とか、愛国心とかを強要なさるその筋のお偉方が、その基本になるような、この事に関しては、一言半句もふれない事は、私は不思議に思えてならぬ。どこかの国にはお弱い方々の遠慮とみるのは、あながち私のヒガミでもあるまい。

とにかく、パパという言葉はそこいらのあやしげなる女性がパトロンを呼ぶ時、ママと言うのは、酔ぱらった助平野郎共が、酒場のマダムを呼ぶ時に使うのが一番適した言葉で、日本の家庭の中に持ち込むのは御免こうむりたいものだ。

父の如秋は厳めし
母の如秋はなつかしい
家持たぬ児に。

この心にしみいるような歌の味わいも、父なる言葉、母なる言葉の偉大さからくる、日本人的哀愁ではなかろうか。

（一九六六年九月）

# 子どもの教育 ⑪

## 父親も責任分担を

港務・新港分会
島　文枝さん（35才）

### 心のかよいあい

子どもは中学一年の男の子と小学四年の女の子です。

私が主婦会の役員をしていて家をあけることが多いので、子どもは「お母さんはなぜ昼も夜も会議があるの？」と聞きます。主人も母親がついていないから子どもが勉強しないと思っています。

私自身も子どもの宿題もみてやれないときは涙が出るときがありますし、子どもにもしわよせがきますが、それでも子どもたちは、自主的になんでもやれるようになりました。

カギっ子の非行化がいわれますが、一番大切なことは家族の心のかよいあいではないかと思います。どんな用事で家を留守にするか話し、必ず黒板にお互いに用件だけでなく、いろんなことを手紙にして書きます。子どももその手紙を読むのが楽しみで学校から急いで帰っているようです。

### 男女区別なく

PTAに出ることも主人の苦手ですが、一般的にみても出席者が少ないようです。保守系はPTAをにぎって、結局は個人の家庭が苦しむようなことがきめられています。だから無関心にはハラがたちます。

また主人は買いものがとても苦手です。これは昔からの〝男は買いものはしない〟というしつけのせいだと思います。だから、子どもには男と女の区別なく能力がのばせるよう育てたいと思います。

子どもたちには、どちらにも交替で家事を分担させます。買いものも〝男だから恥かしいこと〟でなく〝あたりまえのこと〟としてできるようにしたいと思います。子ども自身は平気です。

それは、これからさき子どもの長い人生のなかで、どんなことがあっても乗りきれるように、そして古い社会から新しい社会へと移りかわってゆく歴史に、子ども自身が応じてゆくようにという親のねがいでもあるのです。

### 家族の変化

私の家庭のなかをみてみると、昔とずいぶん変ったと思います。それは、主人が変ったことが大きな原因です。昔は暴君で、いまは妻を人間としてあつかうようになったことです。

家族会議をやっていますが、そのなかで「家事の分担をしよう」と決めたのですが、昔ならもう考えられないことでした。

ところが、子どもの教育のことだけは、一切妻の責任と思っています。やはり父親も責任を半分もってほしいと思います。

# 奥様モノ

### 土いじりの前に

お庭の草はとりたいが、ツメに土がはいってよごれるのはイヤだし――こんな時、ポリエチレンの手袋をはめてとるのも結構ですが土いじりをする前に、化粧石けんでも洗たく石けんでもかまいませんから、ツメでかいて、ツメの中に石けんを入れておくと、仕事が終わって手を洗う時、ブラシでこすると土がツメの中に残りません。

# 創作

## 広子の帰省

左藤臣芳（四山）

家に帰ると、何も知らない姉の初子はさきに夜食をすませ、縁側で無心にテレビを見ていた。母は身体がだるいといって早く床についていた。仕事にでて、飯を食べテレビを見るくらいが勢一杯の乾燥した炭住の生活――そこには充実したゆとりというものは、爪のあかほどもないのだ。まして女は恋をしているときほど、何をしていても充実した美しさをみせる――というのにテレビの台詞に笑い興じている初子からは、そんなものはヒトカケラも見出せなかった。

広子はむしゃくしゃして、誰にあたるともなく、流行歌をがなりたてていたが、ある素晴しい思いつきをした。

「姉さん、黙っておこうと思っていたんやけどな、徹さんが、あす菊池水源地にキャンプに行きはるって、それで、ぜひ姉さんに伝えといてくれと、たのまれていたんやわ」

「それ本当……」

初子は身をのりだしてきた。そして急に燥ぎだすと、これから徹さんに逢いに行くといいだした。広子はあわててとめた。

「姉さん、むこうで何でも準備してはんのよ。あすの朝一番の玉名行快速バスに乗りはったらええのよ、姉さんは弁当を作ったり、朝が早いわ、早う寝たらいい」

広子は具体的に多少誇張してはやる初子を納得させた。

「姉さん、まだビックリさせることがあるんやわ、徹さんと、朝までは内証にしとく約束やったんやけど、実はね、姉さんは水着をもらってんのよ。川のキャンプだからさっそく持っていきはるといいわ」広子は、サイズが少し心配だったが、徹からもらった例の水着を、何食わぬ顔で姉にやった。初子は、もう何もかも嬉しさで一杯の様子だった。広子は、そんな姉をみていると本当にわれながらいい思いつきをしたと思った。

バレても恋人同志のことだ、何でもないと思う。朝になったらテント小屋でなくホテルでも泊れるよう二万円を渡すつもりだった。

広子は、今度の帰省中ですっかり大人になったような気がした。広子はそっと窓辺にたった。暗い空には一杯星が輝いて、一つ、また一つ、流れ星が消えていく、それはあすもまた、きっと快晴の天気を約束するように快よい眺めだった。

（おわり）